忘れられた記憶と夏

正体不明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
忘れられた記憶と夏

【Ｎコード】
Ｎ４５５９Ｎ

【作者名】
正体不明

【あらすじ】
高校一年生の夏休み直前、一人の美少女が転校してきた。
そこから始まる、彼と彼女の小さなひと夏の物語。
そこから一体何が起こるのかは、読んでからのお楽しみ。

（前書き）

すいません。初めての短編です。宜しくお願いします

僕は記憶喪失だ。
いや、いきなり何だ。とか、そんな大したものじゃあ無い。せいぜい小学生４年より前の記憶が朧げなだけだ。それに、かなりの事は思い出したし、高校一年生の今となっては良い思い出だ。
そして、僕には昔から飼っている亀がいる。
その亀とはミシシッピアカミミガメ。通称ミドリガメだ。僕はコイツをプニと呼んでいる。
一体いつから飼っているのかは分からない。僕は記憶喪失のせいか忘れた。父さんと母さんによると、ずっと前、川から僕が連れ帰ってきたらしい。でもその『ずっと前』というのが、いつの事か二人とも覚えていない。もちろん、僕もだ。
コイツの世話は僕の役目だ。特に思い入れのある訳でもないけど、別に嫌という訳でも無い。だけれども、なぜだか好きにもなれない。亀が嫌いな訳でも無い。むしろ好きな部類だ。でもどうしてもコイツの世話が好きになれない。

今日は7月１０日の平日。学校だ。今年はなぜだか梅雨が始まるのも終わるのも早く、もう外はかんかん照りの日光さんさん。
太陽さん。こっちとしては、馬鹿みたいに頑張ってくれている所申し訳無いんだけど、熱中症でバタバタ人が倒れたり温暖化の原因になったりしてるからもうちょっと自分を抑えてくれよ。
と、言いたくなってしまうくらいの暑さだ。
そんな中、ベランダで水槽の中をプカプカと泳いでいるプニが目に止まる。
はぁ、お前がうらやましい。
僕は暑い通学路を歩かなくちゃいけないんだ。
嫌々ながら靴を履く僕。

「行ってきまーす」

「行ってらっしゃーい！秋羅(あきら)兄ちゃん」

元気いっぱいに僕を送り出すのは僕の妹、早風春海(はやかぜはるみ)。小学三年生で今日はどうやら創立記念日とかで休みらしい。

ちなみに僕の名前は早風秋羅(はやかぜあきら)って言う。

秋と春。親がどんなセンスで付けたのか、まるわかりの名前だ。あと一人居たらどんな名前つけるつもりだったんだろ？

そんなどうでも良い事を考えながら、駅に着いて、電車が来るのを待つ。

屋根の下にいるにも関わらずに、湿度の高い日本特有の梅雨明け直後のムシムシとした暑さは僕の不快感を掻き立てる。ミンミンジージーと、蝉の鳴き声が聞こえてきた。それが夏の暑さを増幅させ、なおいっそう汗の量を増やす。

「……？」

そんな中、僕は待っているうちにちょっとした、本当に少しだけ普段とは違うイレギュラーである光景を見つけた。

僕の待っているホームと同じホーム……と言っても、僕とはかなり遠い。僕が見ているのは僕とは反対側のホームの端の方。

僕の学校のモノと同じ制服を着た女の子がそこにいたのだ。

その女の子は昨日までは一回も見た覚えが無い。もしかしたら忘れているだけなのかもしれないけど、それは無いと思う。

それは何故か。答えは単純で簡単だ。別に僕はシャッターアイを持っていたり完全記憶能力があるって訳じゃあ無い。

……何故なら、その女の子はとても綺麗な黒くて長い髪とと

っても可愛い顔をしていたから……多分、一度見たら忘れようとしても絶対忘れる事が出来ないくらいに……。
ってそう長くじーと見ている訳にも行かない！　このままじゃあストーカーか変態だ。しっかりしないと。
僕はブンブンと首を振り必死に欲望を断ち切り、女の子とは反対の方を向いた。
女の子はこちらの様子に気づいていないようでよかった。本当に！
『電車が来ます。黄色い線より内側にお下がり下さい』
その時だった、電車が来たのは。

＊＊＊

「なぁなぁ、秋羅。今日転校生が来るらしいぜ？」
「本当かよ？　こんな中途半端な時期に転校生なんてくるはずないだろ」
「マジだって！　賭けても良いぜ？」
「何を賭けるんだよ？　修貴（しゅうき）」
「今日と明日の昼飯代でどうだ？」
「乗った！それじゃあ僕は来ないに賭けとくよ」
「俺は女の子が来るに賭けるな。男が来てもお前の勝ちで良いぜ？」

「おいおい。それじゃあ、ありがたくその条件で受けるよ」

ここは僕の通う高校の教室だ。ここら辺に住む人はたいていこの高校に入る。

僕の家からも案外近く、電車で二駅ほど。自転車でも十分に来れる距離だ。規模も設備も歴史も部活も資金も生徒も教師も全て普通。そんな高校だ。これほど普通だと、逆に何かあるんじゃないのか？

と勘繰りたくなるくらいに普通の高校だ。

僕と話していた男は柊修貴（ひいらぎしゅうき）。僕の親友だ。

「おっ。そろそろ鐘が鳴るぜ。俺の正しさが証明される時間がな！」

「賭けに勝つのは僕だ！　普通に考えてもそうだろ？」

「ふ、俺をなめるな秋羅！　実は先生達の会話を盗み聞きしてな。このクラスに女の子が来るって情報を確認済みだ」

「ふーん……ってえぇ！？　こ、この賭けは無効だ！　お前最初から分かっていたんだろ！？　反則だ！　僕は絶対に昼飯代は払わない！」

「約束は守らないとなぁ！」

「コイツ…！　自分の事は棚にあげて…！」

「ホームルーム始まるぜ？」

「く…コノ野郎め」

「さぁ、転校生を紹介するぞー」

僕たちが駄弁っていると、先生の言葉とともにホームルームが始まってしまう。

どうやら、転校生の事らしい。

畜生コイツの言った事は本当だったのかよ……。

はぁーあ……僕の財布の中が寂しくなる。

僕は机に突っ伏しながら思う。

修貴の奴め、こいつの食欲は半端無いからなぁ。大食い大会にでも参加してろよ……とでも言いたくなる。

「新條美希（しんじょうみき）です。宜しくお願いします」

そして転校先の自己紹介だ。

顔くらいは見とくかと思い、けだるそうに僕は顔を上げる。

それが正解だったのかもしれない。いや、確実に正解だった。

「あ……」

僕はつい、ほうけた声を出してしまう。しかし周りは気づいて無かった。

でも、僕はこの時そんな事を気にしている場合では無かった。

何故なら……その『転校生』とは、今日駅で見た女の子だったのだから……あの綺麗な黒髪と可愛い顔を見る限りでは、間違い無かった。

＊＊＊

「いやー。あの子は学園に初めてやって来たアイドルって感じだぜ！
この学校の女の子の中では飛び抜けてるしな」

「あぁ、そうだよな修貴。休憩時間の時に質問しに来る奴とかは半端無かったし」

僕と修貴は今、屋上にて売店で買ったパンを食べつつ話をしている。

今日はなんだか、売店に来る人数が心無しか少ないような気がした。

多分、あの転校生のせいだろう。

昼休みの最中。僕たちは、昼飯も食べずに質問しに来る人たちを横目に見つつ、パンを買いに行ったのだ。心無しか減った人数は、その人たちの事だろう。

「それにしても、おかしな話だよなぁ。こんな夏休み直前何ていう中途半端な時期に転校だなんて」

「気になるのか？」

「そりゃあ気になるに決まってるよ。あんな綺麗な……ゴホンゴホン！
こんな時期に転校してくるだなんて」

「そう言うと思っていたぜ」

修貴はどこからかメモ帳を取り出して。

「とりあえず俺が耳にした情報だと、あの子の誕生日は９月１０日。血液型はＡＢ。好きな食べ物はチーズケーキで嫌いな食べ物は無し。それでどうやら兄弟はいないみたいだぜ？」

「いきなり転校生にストーカー的行動かよ？」
僕はケラケラと笑う。もちろん冗談だ
「席が近いと質問しに来る奴らのせいで嫌でも聞こえてくるって。それに俺が女の子の情報を聞き逃すと思っていたのか？」
「そうかよ。全くお前は相変わらずいつでも性欲満タンだよな」
「おいおい秋羅。七月に入ったら夏休みはもうすぐだぜ？夏休みを一人で過ごすのは淋しいだろ？夏休み直前ってのは彼女を作るための大チャンスなんだよ」
「僕はストーカー行為までして彼女を作りたいとは思わないけどなぁ」
「はいはい。お前には可愛らしい妹ちゃんがいるから良いよなシスコン君」
「変態ストーカー君には言われたくないよ」
僕と修貴は二人してケラケラと笑っている。
僕も修貴も言っている事はただの冗談。お互いそれが分かっている。
それが普段。それが僕たちの日常だ。
＊＊＊
キーンコーンカーンコーン

最終授業終了のチャイムが鳴る。後は帰るだけだ。辺りを見ると、とっとと荷物をまとめて帰る奴らや、友達と教室でいつまでも喋っている奴ら、部活の用意をする奴らなど、それぞれ好きな様にしている。

僕は部活に入っていない。特にそれと言った理由はないし。惹かれるような部活が無かっただけだ。後は面倒臭かったくらいだ。僕と同じく、修貴は部活に入っていない。理由は単純にして明快。『彼女を作るためにこそ時間を裂きたいから』である。

むしろ、どうしてコイツに今まで彼女が出来なかったのかが不思議なくらいだ。顔は決して悪く無いのに……まぁ、こんな事を言ってるからだろうけどな。

「それじゃあ帰るか」

「あれ？　修貴。あの可愛い転校生と何か話したりしないのか？」

「タイミングだよ。タイミング。初日から話しかけるなんて下心丸出しだぜ？一週間後ぐらいが一番良いんだよ」

「流石変態」

「変な四字熟語を作るなよ秋羅ぁ」

馬鹿な会話を繰り広げつつ、僕と修貴は校門を出た瞬間に道を別れる。家の場所が全く違うからだ。

「秋ちゃーんっ！」

僕が家に着いた所で、隣の道の向こう側から声が聞こえてきた。

『秋ちゃん』とは僕のニックネームみたいなものだ。

でも、この呼び方をするのは一人だけしかいない。――僕の母だ。

「どうしたんだよ母さん。あと、うっとうしいから抱き着くのは止めて」

向こうから、主婦とは思えない速さで僕に駆け寄って抱き着いて来た、元陸上部だったらしい母さんを押しのけつつ尋ねる。

「秋ちゃん。春海を知らない？」

「……へ？春海？春海がどうしたんだよ？」

ここで母さんは一拍おいて。

「実は……春海が行方不明なの」

「え……？」

母さんは言葉を綴る。

「今日、昼ご飯を食べた後に突然春海が友達と遊んでくるって言い出して、４時までには帰ってねって言ってたのに、なかなか帰って来ないから心配になって……心当たりのあるお宅に連絡しても知らないって言われたし……」

なんだその程度か、と僕は思った。

でも僕はそんな考えを打ち消す。行方不明は言い過ぎかもしれないけど、それでもかなり心配だ。

「とりあえず、僕は荷物を置いてから付近を見て回ってくるから母さんは家で待ってて」

そう言って、僕は荷物を置いて出て行った。途中、プニの水槽の蓋が開いてた様な気もするけど、そんな事を気にするよりも今は春海を探す方が先決だ。

＊＊＊

「ひっく、ひっく……」

聞こえてくるのは小さい女の子の泣き声。

空は赤くなり、すでに日が沈む寸前。

夏の日暮れは遅い。それがもう既にかなり遅い時間である事を示していた。

山道から少々離れた、町を一望出来そうな気もする、木も無い開けた丘の上で小さな女の子は座り混んでいた。

「……あれ？」

そこに一人の女が現れる。高校生くらいだろう。長く綺麗な髪をしていた。

そして彼女は小さい女の子に気づいた

「ね、ねぇ、一体どうしたの？」

「……ひっく、ひっく……お姉ちゃん……誰？」

「私？　私の名前は新條美希（しんじょうみき）よ。キミの名前は？」

「…ひっく……春海だよ」

「そっか春海ちゃんか。それでどうしてこんな所で泣いているのかな？　お母さんが心配するよ？」

「……ひっく、実はね……プニを逃がしてしまって……ひっく」

「そっか。だったらお姉ちゃんも一緒に謝ってあげるから、泣くのは止めて帰ろうね？」

＊＊＊

「はぁ……はぁ……」

僕は町を走っていた。日も沈み、辺りは薄暗くなっていた。

それでも春海の姿は見当たらない。そんなに遠くには行くはずが無いんだけどなぁ……。

『誘拐』『拉致』。

そんな言葉がふと頭を過ぎる。

でも僕はそんな考えを振り払い、とりあえず家へと戻ることにした。もしかしたら帰ってきてるかもしれない。

すると、家の玄関先に見えたのは母さんだ。
「母さん。春海は帰ってきた！？」
「秋ちゃん！？　見つからなかったの？」
母さんの様子だと帰ってきて無いみたいだ。
「はぁ……はぁ……そ、それじゃあ、完全に暗くなる前にもう一度探してくる！」
「母さんは警察に届けてくるから！」
夏の日が沈むのはかなり遅い。それは今の時間もかなり遅くになっているという事だ。
どうする僕！？　もう一度手当たり次第に捜してみるか！？
僕は振り返り、今来た道を走り出そうとする。
その時だった。
「は、春海！？」
それは母さんの声だった。
向こうから、誰かに手を繋いでもらって歩いてきてたのだ。その誰かの顔は暗くてよく分からないけど、女の人みたいだ。
「ひっく……ママー！　お兄ちゃーん！　……」
泣きながら、女の人の手を離して近寄ってきて、母さんに抱き着く。
「春海！一体どうしたのこんな時間まで！」

「ひっく……ごめんなさい……。実はお兄ちゃんのプニを逃がして……」

僕はちょっと何かに頭を小突かれたような感覚がした。

そういえば、家を出る時にプニの水槽が開いているのを見た。それか……。

「ごめんなさい……お兄ちゃん……」

春海が僕の方を向いて謝ってくる。

「別に良いよ。お前が無事だったんだし。

それに……春海をここまで連れてきた人。どうもありがとうございます……って!?」

「あ……えぇと、同じクラスの早風君だったよね?」

「そうだけど……転校生の新條さん。どうもありがとうございます」

そう、春海をここまで連れてきた女の人とは、転校生……新條美希だったのだ。

「へ? えぇと、いいよ。別に当然の事をやったまでだしね」

「もしかして友達……? お兄ちゃんと美希お姉ちゃん」

すると、さっきまで泣いていた春海が俺たちの会話に割り込んできた

「あー……うんそうだよクラスメイト」

「それだったら、もうこんな時間だし女の子一人で夜の町を歩かせるのも何だから、送ってきたらどう？　秋ちゃん」

そこで母さんが話に割り込む。

確かにそうだ。こんな時間に女の子を一人で歩かせるのは危険が伴う。しかも彼女は転校生だ。この辺の地理も知らないと思うし迷うかもしれない。

「えぇと……新條さん。良い？　僕が送っていっても」

「あ、うん。良いよ。というか私としては送って欲しいな。家は近くだけど、道はよく分からないしね」

そして、僕は新條さんと帰る事になった。

……どうしよう。無茶苦茶心臓がバクバクする！　それもそうだ。僕の隣を歩いているのは、今日僕のクラスに転校してきたばかりの超可愛い女の子。まさかこんな展開になるなんて、思いもよらなかった。

さっきは春海が帰ってきた安心感でこんな事考えてる場合じゃなかった。でも、そのおかげで優しい人だという事も分かった。

美人で優しい。外見も中身も伴って完璧じゃないか！　そんな完璧美人と一緒に歩いているという幸せだ。

「ねぇ……あの山の名前って何て言うの？」

唐突に、彼女が話しかけてきた。彼女が指さしたのは、俺の家と学校と同じくらいの距離にある小さな山。

「あぁ……あの山の名前は『水地山』。昔、あそこに神社があったらしいけど、今はもう消えたよ。でもその名残か石段が残ってる」

「あそこの丘に春海ちゃんは居たんだよ」

「ふぅーん。……ありがとう。教えてくれて。それに連れてきてくれてありがとう。アイツは僕の大事な妹なんだ」

「そうなんだ……小学生？」

「うん。小学3年生だよ。僕とかなり年が離れてる」

気づいたら、こんな会話を広げてた。始めの緊張はどこへやら。すっかり消えてしまった。

そう、まるで始めて話したのでは無いように。

「私、一人暮らししてるんだ」

「へぇ……そうなんだ。大変だね」

「そんな事は無いよ。慣れたから平気……っと着いたよ。ここまで連れてきてくれてありがとう。また明日ね」

「うん。また明日」

そうして僕たちは別れていった……。

そこでふと、僕は疑問に思う。

「……あれ？　昼間、一言も話してないのに何で僕の名前を知ってたんだろ？」

その疑問に答えてくれる人はいなかった。

＊＊＊

翌日の事である。教室にて。

「おはよ。秋羅。一体どうしたんだよ？　やけに眠そうだぜ？」

「ふわあぁ……何だ修貴か。なんでもないよ。ただ昨日は暑くて寝れなかっただけ」

「本当かぁ？　まぁ別に詮索はしねぇけど」

「本当だって」

ガラガララ

すると、俺たちの会話を遮るように教室の扉が開いた。

そこから来たのは……新條美希。僕の寝不足の原因の２割でもある。

「あ、おはよう。早風君」

「お、おはよう新條さん」

向こうが挨拶してきたので、僕はついあっさりと返してしまう。
ちなみに僕の席はドアに近い。だから最初に挨拶される訳だけど……これに鋭く感づいた、男と書いてケモノと呼べる奴が一人。

「あーきーらー？　なんでお前はろくに話していないのに、何で『早風君』と挨拶されるんだ？」

「うっ……何でもねぇって。昨日ちょこっと話しただけだよ」

「し、真実を話せ秋羅ぁー！　昨日お前に話している暇なんて無かったはずだぜ？　ストーカーか！？　お前ついに……とにかく真実を話しやがれー！！！」

「ぐうぇ！　話す！　話すから襟首を掴んでぶんぶん振り回すのは止めてくれ！　修貴」

そうして僕は嫌々ながら、昨日の事を話す事になる。
ちなみに昨日は寝る時に何故か枕元にプニが戻ってきていて、水槽に入れ直してやる時に水槽のフタを落として色々と語ると長くなりそうな程度に面倒くさい事になったのが寝不足の原因の８割なのだが、それは話せなかった。
なぜなら途中、『ありがとう』とか言われた所でしばかれかけたからだ。度重なる口喧嘩の末、しぶしぶ和解した事は省略する。

そして、一週間が過ぎ、夏休み直前。期末テストもろくに勉強してなく散々な結果になったが、とにもかくにも後少しで夏休みだ。

今は休み時間。教室にて。

「秋羅ぁ……」

修貴が肩を落としながら、話しかけてくる。この所は、よくある事だ。

「なんだよ修貴……もしやまたしても告白してフラれたのかよ？」

「そうだ……これで２０回連続だぜ……」

「確か前フラれたの理由は、『良い人だけど……ちょっと……』でフラれてさらにその前は『すでに彼氏がいる』だったよな？　全く、お前もよく懲りないよ」

「畜生……！　夏休み直前っつーのは、告白の成功率が高いチャンスだっていうのに……！」

「まぁ僕から言える事は無いね。とりあえずドンマイ。
というか、お前が学園のアイドルだとかで騒いでいる。新條さんにはもう告白したのかよ？」「いいやまだだぜ。というか、いくら夏休み直前だからといっても転校してきてわざわざ一週間の子に接触を重ねるのは無理ってもんだしな……畜生。一週間前、いきなりあんなシチュエーションになるお前が羨ましいぜ」

「馬鹿言うなよ修貴。僕はあれから一度も二人きりになるような事にはなって無いしね」

「ふっふっふ……だが忘れてるぜ？　この学校の生徒の大半が行く夏の一大イベントを」

そこで修貴が不敵に笑い出す。
そこで、頭にピンとくる。

「……夏祭りか？」

「その通りだぜ秋羅！　そのタイミングで、告白すれば……」

「全く、お前はよくそんなに彼女作る事ばっかり考えれるよなぁ……」

この町の夏祭りは、８月１日に行われる近隣でも一番のお祭りで、遠くからも結構な人がくる中々に盛大な祭りだ。
町全体が総力をあげて取り行われて、ある種の町起こしにもなっていて、僕は産まれた時からこの町に住んでるし、毎年必ず行っている。

「お前が枯れてるだけだって、普通の奴なら彼女を作る事だけに頭がいっぱいだぜ」

「なにおう？　お前が変態なだけだって」

そこから相変わらず、例に漏れずいつも通り始まる口喧嘩。しかし、その決着は最後までつく事が無い。何故なら次の授業が始まるからである。

その日、夢を見た。『またか……』と僕は思う。
そう、前にも同じ夢を見た事がある。もう一週間前の事だ。小さ

な……そう小学生くらいの僕と、小学生くらいの僕と同じくらいの年齢の女の子とが二人で遊んでいる。
一体何なんだろうかこの夢は。謎だ。そんな事を思いながら、目覚めてしまう。

頭がはっきりとした所で、時計を見る。掛け時計に示されてるのは朝5時、二度寝するにも中途半端な時間だ。
仕方が無く、僕はふとベッドの傍らに置いてあった漫画が手に取り、読み出した。その漫画の中で、気になる一文を見つけた。
「『記憶喪失とは、思い出したくない記憶を自ら封印しているだけだ』か……」
そう呟いて、漫画を置く。あっという間に時間は過ぎていく。もう時間だ……。

夏休み間際の時、教室でメール交換している奴らが目立つ。夏休み中、普段よりも会いにくいからだ。
当然、転校生で学校からの女の子たちから一際外れた超美人。新條さんの周りには大量の人がメール交換しに来ている。同じクラスどころか、違う学年の先輩達まで来ているのは驚きだ。
正直、教室内の人口密度が飛躍的に上がって、クーラーが効いていても無茶苦茶熱苦しかったりする。
「……？」

……そちらの方を見ていると、新條さんがこちらの方を向いて、目が合ったような気がした。

「諦めろよ秋羅ぁ。俺は告白してないけど、噂に聞いた話しじゃあ好きな男がいるらしいぜ？」

そんな時、横から話しかけてくる男が一人。僕の親友だ。
すぐにそっちの方を振り向いた。

「おいおい。諦めろよって何だよ修貴？　僕は別に新條さんが好きだとも、興味があるだとも言ってないし。
ってか所詮、噂って大抵があらぬ事ばっかりだろ。そんな噂、眉唾ものだよ」

「おいおい俺は別に新條ちゃんに限定した訳じゃあ無いぜ？」

「う……ぐ……そ、そんな事関係無いだろ！
というか、その噂にはっきりとした確証はあるのかよ？」

「それがあるんだぜ。
実は新條ちゃんに告白してフラれた奴からの話しを聞いてみるに、どうやら皆、同じ理由……『好きな人がいるから』でフラれているらしいぜ？　一人残らずな」

「それだけかよ？　鬱陶しい大量の告白から、避けるためにわざと皆にそう言ってる可能性もあるだろ？」

「そこで質問だ。彼女はそんな噂がつける性格だと思うか？」

「……！？」

「現に、とある奴が面白半分で『嘘発見機』を彼女に使ってみた所、彼女は一つ残らず嘘は言って無かったみたいだぜ？　まぁ、言いたくない事は黙秘したらしいけどな」

「いや、『嘘発見機』って……それこそ眉唾モノの定番系みたいなものだけど、性格の面はいくらか納得出来る部分もあるな……」

「だろ？だったら諦めろよ。新條ちゃんは俺が貰っといてやるから」

「ぶほっ！　好きな人がいるから諦めろよって言ったのはお前じゃないか！」

「奪い取る恋も有りだぜ？　というか新條ちゃんには興味無かったんじゃないのか？」

「それとこれとは別問題だっ！」

馬鹿会話からの口喧嘩の流れは普段のパターンだ。そんな中、ふと目の端に写ったのが新條さんの姿。

こちらの方は向いていない。きっと、さっきのは僕の自意識過剰だったのだろう。

放課後である。

僕は、一人で校門を出た。修貴も他の友達もいない。なぜなら僕は一人残って図書館で調べ物をしていたからだ。

その調べ物とは、『記憶』の事だ。たまに無性に調べてみたくなる事がある。

その理由は言わずもがな、僕がごくごく微小な記憶喪失だからと。

「記憶と夢か……」

駅へと向かいつつ、考える。

もう一つの理由、それは近頃見る謎の夢のせいである。

前に読んだ漫画に、『夢は記憶に密接に関係する』と書かれていた覚えがあるからだ。

本の内容を考えながら、歩き、駅に着く。

時間は会社員とか、部活をやってる学生達がギュウギュウに詰まった満員電車がくる帰宅時だ。

当然来るのは満員電車。僕は普段、少し早い電車に乗るから満員電車に乗る機会は大して無い。

「うーキツイなぁ」

予期せずに呟いた。こんな事になるなら、調べ物なんてしないでさっさと帰ればよかった。でも今更こんな事を考えていても仕方が無い。

そんな中、ふと、人の頭の間に綺麗な黒髪を見つけた。

そしてその着ているものは僕と同じ学校の女子制服だ。

僕はそんな女の子を一人しか知らない。こんな時間に帰っているのかと思いつつ、確認してみるとやっぱりそうだった。

――転校生、新條美希である。

しかし、その様子は何やらおかしい。顔が妙に赤いのだ。

夏風邪かな？　と、一瞬思ったけど違う。彼女は昼間、そんなそぶりも見せなかったし、今の彼女は何かを嫌がっているように見える。

ふと、僕の頭に一つの単語が過ぎる。

（まさか……痴漢か！？）

僕は人の間をくぐって、彼女の所まで行こうとする。でも人の壁が阻んで、邪魔をする。周りからは迷惑そうな目だ。

でもそんな事は気にしてる余裕は無い。

『到着致しました。お荷物お忘れの無いようにして下さい。次は土谷駅です』

そんな中、僕たちが下りる駅との間の駅に到着した。

これは……チャンスだ。この駅は人の移動が多い。この隙を見計らって、少しでも……近づければ！

「……見えた」

新條さんの後ろにいる中年くらいの男……微妙にニヤついている。そいつが……お尻をいやらしい手つきで触っていた。

「……っ！」

それが見えた瞬間、つい、拳を握りしめる。

出来る事なら、今すぐにでもそのニヤついた顔面をぶん殴ってやりたい！　……でもそれはマズい。大事になったら駄目だ。

バッ！

奴の痴漢している方の腕を取り、引き上げる。

「……っ。何かねキミは！」

白々しい態度……ますます腹が立つ。まるで自分が被害者だと言わないばかりのその声が、ソイツへの怒りを増幅させる。

「……とぼけるなよ。僕は見ていたんだ」

押し殺した声で奴に語りかける。

「痴漢をしていたのはお前だろ……？　警察に突き出したって構わないんだけどな…」

「……俺が痴漢なんて真似していた証拠がどこにあるっつ！」

つい、手に力を込めてしまう。

僕はもうとっくに本気でキレてるんだ。こんな下衆野郎、死んだ方が良い。

僕はブチ切れてるけど、周りが見えてない訳じゃあ無い。

何だか驚いてるような表情をした、新條さんの顔が見えた。

「あ、あの……私に痴漢をしたのは貴方です」

でも新條さんはすぐに状況を理解して僕に目配せしてから、彼女から救援だ。

「なんだとぅっ！？」

男は逆上する。

僕からは追い打ちだ。

「そっちこそよく考えてみろ。この状況で不利なのはどっちだよ？

そっちだろ？」

「う……ぐ……」

それから、男は暫く考えて。

「……いくらだ？」

「……？」

「示談金だよ。いくら払えば見逃してもらえる？　どうせ金目当てなんだろ？」

「……つっ！」

僕の握った拳が怒りで震え出す。

示談金だと？　金さえ払えば何でも許して貰えるってのかよ？

ましてや僕が金目当てにやったって！？

当然、そんな事は無い。これは僕の良心に従った行為だ。それをこの男は平然と『金の為』だと思ったらしい。

（……そんな腐った思考がむかつくんだよおぉ！！！）

心の中で怒鳴りつける。

本当なら、殺してやりたい。でも、ここは電車の中だ。騒ぎを起こしたら駄目だ。

でも、そう思っていても駄目だ。コイツの顔を見てると理性じゃあ抑えきれない。とにかく殴り飛ばしたい。

「……行こう。新條さん」

「う、うん……」

その時、ちょうど、駅……僕たちが下りる駅に着いた。
そして僕たちは誰よりも先に電車から下りた。
その時、奴がどんな顔をしていたのか、想像もしたくない。ただムシャクシャするだけだ。

「あ、ありがとう……早風君」

「ううん。良いよ。別にお礼目的でも何でも無くて僕が勝手にやった事だしね。それじゃあ」

「あ……」

僕たちは駅から出てちょっと歩いた所で、あっさりと別れる。
……これ以上一緒にいるのが、何故だかどうにも……
何と言うか、気恥ずかしかったからだ。

＊＊＊

翌日、夏休み前最終日だ。

「明日からは夏休みだぜ！」

「どうしたんだよ修貴？　結局夏休み直前まで、彼女出来なかった癖に。それとも、夏祭り中に絶対彼女を作る方法でも考えたのか？
それとも、頭が変になったか」

「ちっちっち。違うぜ秋羅。実はな……明日、合同コンパ。略して合コンの約束を取り付けたんだぜ！」

「本当かよ！？　しかもよりによって、夏休み始まっていきなりって……よく約束取り付けられたな？」

「俺の交流層を甘くみるなよ秋羅。こういう時に、つくづく友達は持つべきものだと思ったぜ」

「要するに、お前の友達が取り付けてくれたのか……」

そこで会話は一段落し、僕は改めて辺りを見る。やはり、昨日と変わらない。いや、昨日よりもなお一層増している浮かれた空気だ。夏休み直前のメアド交換……という事は僕からはしない。
そこで、ふと視界の端に学園のアイドルが見えた。
新條さんだ。
彼女は僕の方へ段々と近づいて来る。でも、僕に用事は無いだろう。
万に一つ用事があるとすれば、昨日の事だけど、何度もお礼を言われるような事じゃあ無いはずだ。
……でも、その予想はあらゆる意味で外れていた。

「早風君。メールアドレス、交換しようよ」

それは、彼女の声だった。

ここで長い長い、とっても長い前置きは終わる。
そして、ここから物語は急加速度的に進み始める。
誰も意図せずに、そして誰も知らずに。
忘れ去られた小さな思い出。
夢と記憶で語られる。
新しく、そして古い、ちっぽけな恋のお話。

＊＊＊

「うー、暇だー」

夏休みだ。僕は大きく背伸びしながらそう言っている。
夏休み中の予定なんて、皆無に近い。一切合切予定なんて立てて無いのだ。まぁ、予定なんて無くてもなんとかなるだろうと思いながらとりあえずクーラーを効かせた部屋で、地球温暖化の事も考えずに寝る事にする。
宿題？　なにそれ？

～～♪～～♪～～～♪

そんなタイミングで、枕元から携帯の着メロが鳴る。
僕はすぐに手に取って確認する。……修貴からのメールだった。

『よう……秋羅ぁ……合コンの話しだけど、女の子が一人たりとも来ないという最悪の事態だったぜ……つー事で頼みがあるんだが、誰か女の子紹介してくれない？』

「……流石の修貴も、今回ばかりは参ってるみたいだなぁ。よりにもよって僕に女の子を紹介してくれと頼むなんて……疲れてるとしか思えない。『まぁ僕から女の子紹介するのは無理だけど、頑張れよ。そのうちチャンスはきっと来るから』っと送信」

僕はメールを送り返す。
それからちょっとして。

〜〜♪〜♪〜〜♪

また携帯が鳴る。きっと、修貴からの返信だろう。
でも違った。携帯の画面に表示された名前は。
『新條美希』
彼女からだった。

『初めてメールするけど、ちゃんと届いてる？
……それと、今日は暇？　だったら、頼み事があります』

おかしなメールだと思った。僕と彼女はそれほど親しい間柄では無いからだ。メアド交換したけど、そのくらいだし。

『今日は暇だよ。で、用事って何かな？』

完結に、こう返信する。
すると、すぐにメールが来た。

『迷惑な話しだけど、よかったら駅の所まで来てくれないかな？
私、まだこの町に来たばかりで、この町の事をよく知らないの。
だから、この町を案内してくれないかな？』

成る程、と思った。僕の学校で、この周辺に住んでいるのは同じクラスでは僕だけだ。一番頼りになるのが僕だったんだろう。

『うん良いよ』

二つ返事で了解した。

＊＊＊

楽しかった。

つくづくそう思う。

僕と彼女は二人で町を歩いたのだ。多分、修貴辺りにこの話しを聞かれたら絶交されそうな気さえする。

「今日は私も楽しかったよ」

「それは良かった」

もうすでに、気づいたら夕方だった。時が経つのは早い。それがより楽しいほどに……。

「この町の事に詳しいんだね」

「そりゃあまぁ、小さな頃からこの町に住んでいるからね」

僕と彼女はすでに帰路につこうとしている。ちなみに僕は彼女の家の近くまで送るつもりだ。一通り案内して、それじゃあね。じゃあ無責任にもほどがある。

「ねぇ、最後にあの山のふもとまでで良いから案内してくれないかな？」

「うん。良いよ」

相変わらずの二つ返事、素っ気ないようだが、僕としてはこれが精一杯だったりする。

彼女が指差したのは、確かこの間、妹の春海が泣いていたらしい山、『水地山』だ。……着いた。

「ここが山の入口だよ」

「ふーん……」

「良かったら……上まで案内しようか？　何も無いけど。これで最後なんだし」

「うん。ありがとうね」

僕と彼女は二人で長い石段を上り始める。

会話しつつ、二人で上る。スカートの中が見えたら悪いから、僕が先だ。

「あ、こっちの道の先で春海ちゃんは泣いていたんだよ」

後ろから、彼女の声が聞こえた。

彼女が指差したのは、石段を上る途中の横道だ。

「行こうよ。早風君」

すると、彼女が唐突にこんな事を言い出した。

「別に良いけど……」

少し渋く返事をする。

何故なら、この道の先に僕は行った事は無いからである。

今までここの石段は何度も上った事がある。でも、そっちの横道には行った覚えが無い。その理由は特に無いけど、強いて言うなら面倒くさかったからだ。

「じゃあ行くね」

「あ……」

彼女は横道の先へ行ってしまう。

「……っ」

僕は、追いかけようとして踏み出した足がつい何故か止まってしまった。

ここで、なんでこのタイミングでかは分からない。

しかし、今は何故だか直感した。面倒くさかったからでは無い。

僕は『意図的に避けていたんだ』と……。

理由は分からない拒絶感。でも僕はそれを振り払い、そこから更に一歩踏み出し走り出す。追いかけない訳には行かない。いや、追いかけなくてはいけない。

「し、新條さん！」

青々とした木々の間の道を走っていると、小さな広場に出る。そこには一人の女の子の背中が見えた。

「駄目だよ。勝手に行ったら……」

「ごめんなさい。早風君」

彼女は素直に僕の方を向いて頭を下げてきた。でも、そこから彼女は言葉を繋ぐ。

「でも、ここにはどうしても来たかったの……」

彼女は向き直る。そっちの方にあったのは、急坂にも似た下に木々が立ち並ぶ崖と、落下防止の柵だ。

そして……僕たちの町。

「うわぁ……」

つい感嘆の声を出す。こんな場所があるだなんて、僕はこの町に長年住んでいたくせに知らなかった。

「綺麗でしょ？」

「うん……綺麗だね」

僕は返事をする。でも、ここでまたしても疑問が生まれた。

「ねぇ……新條さん。キミは何で、こんな場所の事を知っていたんだ？」

普通に考えたら、彼女は妹の春海を見つけた時にここに来ている。
でも彼女は何で、その時にこんな場所に来たんだろうか？

「っ！　……そっか」

彼女はそこで一瞬だけ悲しそうな顔を見せたけど、すぐにいつもの顔に戻る。

「私って前にこの町に住んでいた事があるんだ」

「え……？」

衝撃の発言。こんなフレーズが頭の中を通り過ぎ、間の抜けた声が聞こえた。

……僕の声だ。

「……そうなん、だ」

しかし、何とか平静を取り繕って返事をする。

「うん。そうだよ……今日は楽しかったよ。早風君」

「……僕もだよ」

それから暫く訪れる無言……。　その沈黙は、数秒なのかも知れないし、数十分だったのかもしれない。そのくらい長く感じられた。
その沈黙に耐え切れず先に破ったのは僕だ。

「もし、良かったら……夏祭りの間、僕と一緒に居てくれないかな

？」

なんで、そんな言葉が出たのかは分からない。でも、その言葉はまるで息をするかのように、自然に出た。そのくせに、僕の顔は見るまに赤くなる。

「……うん」

「へ？」

「うん良いよ」

聞き間違いかと思った。でも、その言葉はしっかりと僕の耳に届いた。

「め、迷惑だったのなら良いよ！　ほら、新條さんの都合とか……」

むしろ、慌てたのは僕だ。まさか、了承されるとは思ってなかった。玉砕覚悟だったのだから。

「そんな事……無いよ」

彼女の頬が、赤くなっている。

その事に気づいたのか彼女はそっぽ向いて。

「今日は、本当に楽しかったよ……」

そう言って、彼女は走り去って行ってしまう。

「……！」

そして、僕はとある事に気づいた。

「似ている……？」

そこで脳裏に写ったのは、最近夢で見る、小さな僕と遊ぶ、小さな女の子の後ろ姿。

その女の子の後ろ姿が、彼女――新條美希の姿と重なった。

ハッとなり、周りを見渡してみる。

「……同じだ」

僕の口から言葉が漏れる。

「何で……僕が夢で遊んでいた場所と、初めて来るここが同じ場所なんだ……？」

その場所は、僕の疑問に答えてはくれない。

＊＊＊

夏祭り、当日だ。

彼女とはメールで何度も連絡をとって、合流する場所は、あの『水地山』のふもとになった。

でも、二人きりのデートと言う訳じゃあない。

何故なら……。

「ねぇお兄ちゃん。美希お姉ちゃん本当に来るの？」

「うん。むしろ僕たちが来るのが早過ぎたくらいだからね」

そうである。僕の妹も一緒だ。理由は単純、僕の両親は用事があり、妹が夏祭りに行きたいと駄々をこねたからだ。

新條さんも知らない訳では無い。前にちゃんとメールした。

ちなみに、修貴の野郎には僕が新條さんと一緒に夏祭りの中を歩く事は言ってない。

きっとデートだデートだと言われてぶん殴られたり面倒くさい事になるだろうし、そもそも伝える筋合いも全く無い。

……これはデートにはならないよな？　春海も一緒だし。

デート……デートといえば、前に僕と新條さんとで町を歩いたのはデートになるんだろうか？

「あ、美希お姉ちゃんだ」

思考の最中、春海の言葉で僕は前の方を向き直る。

「ごめん。待った？」

「い、いいやそんな事は無いよ。むしろ早く来すぎた僕達の方が悪いんだし」

目の前にいる新條さんの姿に目を奪われつつ何とか受け答えする。

だって、浴衣姿だったからだ。

とにかく綺麗。ひたすら綺麗。それ以外に言う言葉が見つからない。

「……どう？　この浴衣、似合ってるかな？」

「う、うん！　とっても似合ってるよ！」

「それは良かった……それじゃあ、春海ちゃんを待たせても悪いから行こうか？」

ちなみに春海も浴衣姿で、普段着なのは僕だけだ。でも何故だか張り切ってしまい、普段着の中でも一番カッコ良くコーディネートしてある。

ワイワイガヤガヤと屋台がたくさん立ち並んでいる。それはもう、尋常ではないくらいにだ。

それもそうだろう。このお祭りは、町全体が総力を上げている祭だ。その規模はかなりのもので、僕の学校の連中も、よっぽどの引きこもりじゃない限りはほとんどの奴が来る。

正直、修貴だけじゃなくて知り合いに会うのは勘弁だ。ましてや、僕はともかく新條さんを知っている人は非常に多い。

でも、この祭は町全体で行われているんだ。知り合いに会う確立はそれだけ低い。

「うわぁ。相変わらず、凄いねここのお祭り」

聞こえてきたのは彼女の感嘆の声だ。

「まぁ、唯一と言っても良い地元の自慢出来る事だから……」

「そこは、昔と変わってないね……」

「……この前聞いたけど、昔、ここら辺に住んでいたんだったね」
「うん。そうだよ」「うん。そうだよ」
「……？」
そこに、割り込んできたのは妹の春海だ。
「……じゃあ、どうして春海お姉ちゃんはここに帰ってきたの？」
これは春海の純粋な疑問……そう感じた。
「……え、えぇと、それは言うのが恥ずかしいよ春海ちゃん」
「ええー！？　だって気になるんだもん！」
この春海の質問には正直、僕もかなり気になる。でも新條さんからしてみれば、かなり失礼だ。
「こらっ！　春海！」
「いいの早風君。言わせて」
僕が注意しようとしたら、新條さんが静止する。
「それはね……春海ちゃん」
そこで新條さんは空気を静かに吸い込んで言う。
「……この町が、好きだからだよ」
その発言とともに、風が吹いた。

木々の葉がさざめき、ザワザワと音を奏でる。

「ふーん……」

風が吹き終えた後、春海は自分が聞いたにも関わらずにそっけなく返事をした。

それから暫く訪れる沈黙……。

「ご、ごめん。何か会話が止まって。今の発言は忘れて！」

「いやいや！　何も言わなかった僕の方が悪いからそっちこそ気にしないで！」

沈黙を破り、最初に起こったのは頭の下げ合い、謝り合い。

と、とりあえずこの空気を何とかしなければと思い、辺りを見渡すが、どうにも出来ない。

「あっ！お兄ちゃん！美希お姉ちゃん！あれ食べたい！」

その空気を破ったのは僕では無く、春海の食欲だった。

……雰囲気も空気も食欲には敵わないという事か。

「わ、私が買ってあげるよ春海ちゃん」

新條さんも空気を変えようとすぐに春海の調子に乗る。

「うーん。じゃあ、りんご飴と隣の屋台のわたあめ！」

見事に両方とも屋台の定番かつ、『飴』という甘ったるい感じしかしない二つをセレクトした春海に対して、特に嫌な顔せずにお金

を払って買おうとする新條さん……って待て待て待てよ！

「待った！　お金は僕が払うから新條さんが払う必要は無いよ」

「え？　いやでも……」

「こういうのは男が払うものだから」

「うーん、でも私のりんご飴とわたあめの分は私で払うよ」

なんだ、新條さんも食べたかったのか……。

「いいや、新條さんの分も僕が払う！　というか、最近お金使う機会が無くてかなり余ってるし」

「でもそれじゃあ……」

「すいませーん！　わたあめを二つ下さーい！」

「あいよ！」

僕が金を払うと同時、威勢の良い声とともに、わたあめが二つ渡された。

「はいこれ。次にりんご飴買ってくるから」

「あ……うん」

春海と新條さんに一つずつ渡し、僕はりんご飴の屋台の方に走って行く。このままでは、堂々巡りになりそうだったから勢いで押し

切る事にした。そして僕はりんご飴も買って、二人に渡した。

「もぐもぐ……あ、金魚掬いっ！」

「はいはい春海。やりたいのなら食べ終わってからな……ってげ！」

次に春海が目をつけたのは、金魚掬いの屋台だったのだが……。

金魚掬いの屋台を見た瞬間、疫病神が見えた。

いや疫病神というのは比喩表現なのだが、もしかしたら僕にとっての死神になるかもしれない。

「いらっしゃいませ！　おっ。そこのかわい子ちゃんにはサービスだぜ！」

（アイツ、何でこんな所でバイトしてるんだよ！？　ナンパ真っ盛りじゃなかったのかよ！？）

その死神の名前を、柊修貴と言う。何を隠そう、その死神は金魚掬いの屋台で働いていたのだ。多分、バイトだろうけど……僕が新條さんと一緒に居るのに気づくと、襲い掛かってきそうな気がする。

「は、春海。ゴメンけど、金魚掬いは諦めてくれないか？」

「えーっ！？　なんでなんで！？」

「ほら、春海ちゃん。向こうにも金魚掬いの屋台があるよ」

すると、新條さんからの助け船だ。
どうやら僕の意図をなんとなくだが汲み取ってくれたらしい。何故そんな事が分かるのかっていうと、僕の方に軽く合図のようにウインクしてくれたからだ。

「お兄ちゃん？　どうしたの？　手も熱いし顔も赤いよ？」

「な、なんでも無いって春海。と、とにかく向こうの方の金魚掬いをやろう。こっちの方のじゃなくて、な？」

最後に少し、強調した言い方をした。

「うん！」

そして妹は快く了承してくれた。

「へぇー。ここの金魚掬いは小さいミドリガメも結構多いな」

「いらっしゃい。ポイは何個いる？」

「それじゃあ三つで」

「三つ？」

新條さんの声に僕は疑問をあげる。ポイ……要するに、金魚掬いの掬うための輪は、春海と新條さんとで三つもいらないはずだ。というか四つなら一人二つずつで分かるが、三つとはこれはまた中途半端だ。

と、思っていたら。

「はい」

「……へ？」

僕の声はまたしても疑問形だ。

何故なら、僕はやるとも言ってないのにポイを渡されるなんて不自然だ。

「ちょっと……僕はやるとも言ってないんだけど」

「良いから良いから。代金は私持ちだし、それに……見たいから」

「……分かったよ」

僕は快くというのとはほど遠いけど、ぎりぎり嫌々感を醸し出さないくらいの感じで返事をする。それに、ぶっちゃけ断る理由もそれといって無い。

「お兄ちゃん……凄い」

妹が感嘆と称賛の声をあげる。

僕はすでに、三皿目に突入だ。ちなみに妹のポイは、すでに破けてしまっている。新條さんも同様だ。

そんな中、僕だけが未だに掬い続けているのだ。

「そこの若いの……凄いな。プロか何かかい？」

「ははっ、金魚掬いのプロってあるんですか？　違いますよ。僕は記憶上では、金魚掬いをやるのはこれが初めてですよ」

金魚掬いのおっちゃんの疑問に、僕は笑いながら答える。
「そうかい……そういうのを天分の才って言うんだろうねぇ。っとついに破けたか。どうだい？　救った金魚……あまりにも多いがいるかい？」
「要りませんよ。そんなに持ち帰ったら、金魚もそして僕も死にます」
「ちげえねぇ」
アッハッハッハッハと僕と金魚掬いのおっちゃん、そして新條さんで大笑いする。春海は何で笑ってるのかよく理解できて無いようだ。

「お兄ちゃん。なんであんな特技、今まで隠していたの？」
「隠していた訳じゃ無いって」
「相変わらず……凄かったね。早風君」
「いやいや、あんなもの、コツさえ掴めば誰だって出来るよ」
「……って相変わらず？」
「あ……う、ううん。何でもないの」

「？」

そこで疑問符を浮かべた僕は頭をブンブン振って、今回は気にしない事にした。

……でも時たま、何故か僕にとって新條美希という人間はとても特異に感じる事がある。

例えば、転校早々にろくに話してすらいないのに、『僕の名前を知っていた事』。他にも、僕がこの町を案内した時も、前にこの町にいたのならば、知り合いの一人や二人は居るだろう……『何で僕を頼ってきた』んだ？

……考えれば考えるほど、謎は深まるばかりだ。聞けば分かるだろうが、あいにく僕にそういうタイプの勇気は無……い……。

グラリ

次の瞬間、世界が歪んだ。

「……っっ！」

「お兄ちゃん！？」

「早風君！？」

二人が僕を心配する声が聞こえた。でも僕にそれを気にしている余裕は無い。

まず最初に襲ってきたのは強烈な既視感。次に目眩と同時にきた、頭を鉄板で叩かれたような激痛。

視界がぼやける。

走る痛み。

火花が散る。
意識が飛ぶ。
そして……脳裏に浮かぶイメージ。

＊＊＊

『うわぁ。凄いね秋ちゃん』

どこだろうかここは？
僕の目前に見えるのは、夏祭りの景色……これなら普通だ。
しかし、その様子は普段とは違う。何というか……何もかもが、古いんだ。戦前とかそんな古さでは無い。せいぜい１０年前くらいの光景だろう。

『そんな事は無いよ』

そしてその夏祭りの一角にある屋台に、僕の目が止まる。
そこには……夢で見る、小さい僕とそして小さい僕と同じくらいの女の子がいた。
二人がやっているのは金魚掬いだ。

『ひゅー。やるね坊ちゃん』

屋台のおじさんの声だ。僕が見た金魚掬いのおっちゃんとはまた別の人……。

『ところで、この大量に掬われた金魚と一匹の亀はどうしようか？』

『戻しちゃって下さい』

『えー？もったいないよ秋ちゃん』

そこで女の子が抗議をする。

『だって仕方が無いだろ？　こんなに持って帰れるはずが無いし……』

『だったら……せめて、その亀だけでも貰ったら？』

『うーん……そうしようか。それじゃあ、やっぱり亀だけ貰います』

『あいよっ！　大事にしてやれよ！』

そして、小さな僕は亀を受け取り、女の子と歩き出す。

『その亀に名前付けた方が良いんじゃない？』

女の子が言う。

『名前？　うーん、そうだね……思いつかないや』

考えるのが短か過ぎるぞ小さな僕。と思ってしまう。

『じゃあね……プニって名前はどう？』

『プニ？』

『そう、何だかプニプニしているから……』

『……うん。良いね。コイツの名前はプニだ』

プニ？　……あぁ、そうか。これはプニがうちに来た時の記……

お……く……。

＊＊＊

「早風君！早風君！」

「お兄ちゃん！」

……意識がはっきりしてきた。

どうやら僕は、頭を抱えて片膝をついているらしい。

「……大丈夫。大丈夫だから」

声が上手くでない。でも、すぐに意識がはっきりしてきた。

「ちょっと、つまづいて転んで、頭を打っただけだから平気…」

僕はそう言ってすぐに立ち上がった。

「で、でも……」

「本当に大丈夫だから……行こうか」

僕は。二人の手を持っていくように促した。

それからは、普通にお祭りを楽しめた。
もちろん、僕が倒れるという事も無く。
……それにしても、アレは何なんだったんだろうか？
僕は楽しみつつも、考える。もしかしたら、仮定の話しだけどアレは……僕の思い出していない過去の記憶か？
ある一節が蘇る。
『記憶喪失とは、思い出したくない記憶を自ら封印しているだけだ』。これが関連しているのだろうか？
「っと、もうこんな時間だね…」
僕は腕時計で確認する。すでに日も落ちて遅い時間だ。
「……今日は楽しかったよ早風君」
「それは良かった」
「……それじゃあ、帰りも皆で帰ろうか」
新條さんがこう言う。
「私はそれが良いな」
今のは、春海の台詞だ。
「って良いの新條さん？　そこまで付き合って貰って」
「だって……春海ちゃんを長い距離歩かせる訳にもいかないでしょ？」

「なるほど……」

僕たちは三人で帰路につく。歩いているのは、お祭りの屋台がたくさんある所からは離れた、夜の暗い道だ。

「うーもう何だか眠いよう……」

「家に帰ってから、すぐに寝るなよ春海。寝るのは晩飯はいいから、お風呂に入ってパジャマに着替えてからだ」

「ふわーい……」

「面倒見の良いお兄ちゃんだね春海ちゃん」

……しばらく続く、他愛の無い会話。

「うとうと……」

「こらこら。寝ながら歩くなよ春海。って器用だな本当に……っと」

「……着いたね」

僕の家に到着した。

「ほら、春海。家の中に入って……」

僕は春海を家の中に入るように促す。

「それじゃあ私は帰るね」

「って新條さん？　送って行かなくていいの？」

すると、新條さんがそんな事を言ってきた。僕の予定では、春海を家に届けた後に新條さんを送る予定だったんだけど……。

「うん。それに春海ちゃんの方もあるし」

「いやでも母さんがいるから……」

「遠慮しておくよ。ちょっと用事もあるしね」

用事……用事ってなんだろうか？　まぁ気になっても仕方が無い。プライベートな用事なんだろう。

「……分かったよ」

僕はそこでしぶしぶそう答えた。

「うん。……あ、そうそう」

そこで、新條さんは軽く僕に向かって微笑んで。

「……私がこの町に帰ってきた理由はね。この町が好きだからだけじゃないんだよ。ううん。むしろ、こっちの方が本当の理由かも」

「え？　ちょっと、それって一体……」

「……じゃあね。また今度」

「あ……」

そこで新條さんはすぐに僕に後ろを向けて、夜の道へと消えていった。
その時、新條さんの顔が少し赤かった気がした。夏風邪……かな？　いや、でもそれとは違う気がした。

「まぁ、仕方がないか」

今のを気にしても仕方がない。それに、また今度にでも聞く事が出来る。

「ほら、春ちゃん……玄関先で寝ないで」

すると、玄関先では春海が倒れるようにして寝ていて、母さんがそれを起こしていた。

「あ、秋ちゃんもお帰りーっ！」

「だーかーら、抱き着くなよ母さん」

僕は抱き着こうとしてきた母さんを片手で押しのける。

そうしていると、突然の事だった。

「キャアァァァ！！！」

耳をつんざく、非常に高い声が聞こえた。
悲鳴だ。
しかも、近くからだ。

新條さんのだ。

「っつ！！！」

僕は気づいたら走り出していた。
道に出る。
すると、その先に見えたのは。

気絶してぐったりとしている新條さん。
三人の若い男。
黒いワンボックスカー。
それに連れ込まれようとしている新條さん。

「新條さあぁぁぁん！！！！！」

何も考えずに、無我夢中で駆け寄ろうとする。
しかし、間に合わなかった。間に合うはずも無かった。
三人の男たちは一体こっちの方を向いてから、とっとと乗り込み行ってしまった。

「畜生おおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

叫んだ。とにかく僕は叫んだ。
走って追い掛けたが、車に追い付くはずも無い。

『誘拐』

春海の時にも思った単語が、今度は現実に僕の背中に重々しくのしかかる。

ドンドンドン！

自分の無力さに腹が立つ。
よりにもよって誘拐されたのは目の前だ。
とにかく僕はそこで地面に向かって拳を叩きつける。
手の皮はむけ、アスファルトの上に血は流れる。

そこで僕はようやく我に帰った。ここでこんな事をしていてもどうしようにも無い。出来る事をやるべきだ。
まずは警察かと僕は思う。しかし、警察に知らせている間に新條さんは……！　それに間違いなく学校中に知れ渡り、嫌な噂が立つだろう。
しかし、僕には出来る事は無い……つっ！
そこで、ある死神の顔が頭に浮かぶ。
その死神は、さっきまでは僕にとっての死神なのだが、今は違う。奴らにとっての死神だ。
モテたがり屋で、女の子を傷つける奴には一切の容赦をしない男だ。
僕は携帯を手にとり、アドレス帳を開く。
そこに出た名前、それは。

『柊　修貴』

僕の一番の親友だった。

＊＊＊

ブルルルルル

風を切り、夜の街中を走る。
あっという間に過ぎていく景色。黒と赤のボディをした大型バイクに乗っているのは二人。

「……次は右に行けば良いんだな？秋羅」

「……あぁ、今は夏祭りの最中だ。ルートは限られている……
それにしても、よくこんなバイクを持っていたな修貴」

「流石、昔からこの町に住んでいるせいか、詳しいな。
それに……当然だぜ。俺を誰だと思っている。女の子を助けるためならいくらでも尽くす男だぜ？」

「……そうかよ」

僕たちの会話は一見軽いものに感じられるが、その内実、雰囲気はかなり重い。

「だからこそ、今日もバイトしてたんだぜ。女の子を助けるためにな」

「……僕たちに気づいていたのか？」

「俺の女の子センサーをなめるんじゃないぜ」

「……流石」

「また変な四字熟語をいうのかと思ったぜ……で、新條ちゃんを助けるのは俺だぜ？」

「あぁ……それでも良いよ。新條さんが助かるのならば何でも良い」

（……まぁ、新條ちゃんが惚れてるのはお前なんだろうけどな。あの笑顔を見た限りじゃあそうとしか思えないぜ）

バイクは走る。黒い車が通った後を追って。的確に追い詰めていく。

＊＊＊

「へへへ……まさか一人暮らしでこんな良い狙い目の女がいるとはな……」

一人の下卑た男の声が、廃工場の中で響く。

「けらけら……犯すのは起きてからだぜ？　だから、この夏祭りの最中というタイミングを狙った」

今度は別の男の声だ。

「へへ……良いビジネスだよな。とことん犯した後、身代金請求して、さらに撮ったビデオでまた金儲けなんて……っとそろそろ目覚めるな」

「う、うーん……」

一人の、床にロープで縛られていた女の子が目覚めた。新條美希である。

「あ、あれ？　ここは……」

「へへ……やっちゃって良いな？」

「い、いや……」

自らのおかれた現状に、ようやく気がついたようだ。

「けらけら……せいぜい抵抗するだけ抵抗しな。どうせ誰も来ねぇよ」

男は、美希の服に手をかけようとした。その時だった。

「待てえぇ！！！」

廃工場の入り口の所に、二人の男が立っていた。

「全くお前らは……男の風上にもおけないぜ」

その二人の名は。

『早風　秋羅』

『柊　修貴』

彼らだった。

「早風……く……ん？」

涙目の彼女は問い掛ける。まるで、これが夢で無いのか確認しているように。信じられないといった感情も込めている。

そして、彼……秋羅の言った言葉はただ一つ。

「助けにきたよ。新條さん」

彼はにこやかに微笑んだ顔でそう言った。

「あーはいはい。てめぇらヒーロー気取りですかぁ？」

その空気を壊す者……二人の所に、新條美希の服に手をかけてない男が秋羅たちの方に近寄っていく。

男は、喧嘩が強かった。

そんなに身体も大きくない高校生二人くらいなら負けるはずがない。

そんな考えで、不用意に近寄る。

それが間違いだと思った時にはもう遅い。

「……黙れよてめぇ」

「こんなモン。腐った男には必要無いよなぁ？」

ドカァッ！

秋羅は顔面を殴り飛ばし、修貴は股間を蹴り潰した。

「ぐげ……が……」

どさっ

男は、静かに地にひれ伏せる。

「て、てめぇ！」

それを見ていて、一人の男が鉄棒を持って襲いかかる。

ガキン

「行け秋羅！」

それを両手を交差して防いだのは修貴だ。

「悪い修貴！」

タタタタタッ

秋羅は美希の方に向かって全力で走り出す。

しかし、美希の側にいるそこに残った最後の一人が。

「止まりやがれ！　止まらないとこの女の顔をコレで思い切りぶち殴るぞ！」

男が持っているのは、スタンガンのように電撃が入る仕組みになっている、改造警棒だ。ちなみにこれで美希を気絶させたらしい。

しかし、それを見た秋羅は止まるのでは無く、むしろ加速した。

「っ！　この野郎っ！」
それに驚いた男は、特殊警棒を美希に振り下ろそうとするが、それは美希に当たる事の無かった。
「早風君！」
「っ。なんて野郎だ」
ビリビリと電撃が走ったのは秋羅の方だった。
寸前で、秋羅が身体を滑りこませたのだ。
「うおぉぉ！！！！！」
しかし、秋羅は倒れなかった。秋羅は踏み留まり、そのまま拳を目の前に突き出した。
ズゴン
「か……は……」
固く。何よりも固く握りしめた拳は男の鳩尾へと命中する。
ズルズルと男は倒れた。
「ひゅう。そっちは終わったか」
それと同時に来たのは無傷の修貴だ。
向こうには男がうずくまっている。どうやら圧勝だったらしい。

「あぁ……終わったよ」
秋羅はそっけなく返す。
「大丈夫だった？　新條さん……いや」
そこで彼は軽く息を吸い込み。
「『美希ちゃん』」
そう言い放った。
それに、一番驚いたのは、そう呼ばれた本人だ。
「まさか……記憶が……」
そこで彼は軽く笑い。特殊警棒を指指して。
「ショック療法って案外効くものだね」
穏やかに言った。
＊＊＊
「……思い出したんだね。秋ちゃん……」
「うん……これで全部思い出したよ。
僕は、美希ちゃんと幼なじみで遊んでいた事もね」

「それだけじゃないでしょ？」

「うん。美希ちゃんが遠くの学校に転校した事もね」

「……私が引っ越す直前のお祭りの日に、ここで遊んだんだよね」

僕らは、『水地山』の広場で二人きりで話していた。
後日という訳では無い。祭があったのと同じ日の夜だ。

「それで、その時……私の不注意で落ちそうになった時に、秋ちゃんが助けてくれた……」

「その時、大して高くなかったものの頭から落ちて、それで僕は記憶を失った……でしょ？　全部思い出したよ」

「ううん」

美希ちゃんは首を軽く振る。

「まだ、思い出していない事があるよ」

「……？」

彼女は、彼の手を握り柵の近くへ引っ張っていく。

「ほら見て。この景色」

「うわぁ……」

上空には漆黒の空の中、天にまたがるたくさんの星達がキラキラと光り輝く。
地には、人々の活気が溢れる屋台の明かりがまるで巨大の花のように、星達の光りに負けないように光り輝く。
その二つのコントラストは、見る者をことごとく魅力する。

「……綺麗だね」

「……」

そう言って、この景色に見惚れている彼女に気づいた僕は、そっと握られた手を握りかえした。

（後書き）

評価・感想どうぞ遠慮せずに宜しくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4559n/

忘れられた記憶と夏

2011年6月4日14時26分発行